

---

# Water Lily

風色

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Water Lily

### 【Nコード】

N6469D

### 【作者名】

風色

### 【あらすじ】

『神様』と出会った少女、睡。世界は抗争の只中にあつた。神様もその只中にあることを知り、睡は自分も戦うことを決意する。神様を見つけたその日から、自分の運命は決まっていた。

## o v e r t u r e

なんと言ったらいいのだろう。

そう、例えるならその日、わたしは神様に会った。

瓦礫の中、朽ちたコンクリに手をついて見上げたそれは、とても、大きかった。

一瞬、赤い焰かと思間違えたほどだ。

わたしはそれを、じっと見つめていた。どれほどの間だろう。数十秒？ 数分間？ 数時間？

ただ、見ていることしかできなかった。

わたしは生身で、対してそれは赤い焰で。

近づく術を、そのときはまだ持たなかった。

\* \* \*

子供の姿を見つけたのはその時だ。

大体の敵勢力も一掃して、確認のため周囲を見回っていたときに、

そいつは視界に現れた。

普通ならこの姿を見れば怯えて逃げ出すはず、と相場は決まっているのに、そいつは逃げも隠れもせず、ただじっと見据えて立っていた。

スピーカーのスイッチをオンにし、警告をする。

『そのガキ、危ないから向こう行け』

言わずともこの体が発する音声だ。向こうに届かないわけもない。今日は風もなく、そこいらを敵機が徘徊することもない。本当なら、声は届いたはず、だった。

子供はまだじっとこちらを見ている。

その視線がただの『視線』と一言で片付けられるものではないと、今になってようやく気付いた。

『見ていた』

何を、ではなく、誰を？

不意に、この体を通過して、俺自身にその目が注がれるのが分かった。

その感覚は、なんというのか。

まるで、自分が神様にでもなったような気分だった。

\* \* \*

行ってしまふ。あのひとが、行ってしまふ。  
赤く紅蓮の背中を向けて、あのひとは行ってしまふ。  
追いかけなきや。追いかけて、追いついて、そして。

会わなきや。神様に。

\* \* \*

無残な記憶の残滓だけがその姿を横たえる瓦礫の街で、少女はそれに出会った。  
疑いという愚問を差し挟むことなど夢にも思わず。  
走り出した。  
途中、いつのものか、電柱に足を取られ、転びかける。  
転んでも下を向くことなく、少女はただ、それを見ていた。  
そして、もう一度走り出すために、立ち上がる。

よく晴れた、風のない日。

神様と少女は出会った。

## 第一話：少女

行く時は確かに二十五歳独身だと思っていたのに、相棒は十五歳の女の子持ちのパパになって帰って来た。

「おいおい、どんなマジックを使ったんだ？」

「うるせえよ。こいつが勝手に来たんだ」

久しぶりにここまで怒る相棒を見て、ジェミニはおや、と目を丸くした。こいつ、こんなに感情表現をする奴だったっけ？

ともかく、なおも少女に怒鳴って追い返そうとする相棒をなだめると、腰をかがめて、まだ相棒の腰元に張り付いている少女へと視線を下げる。

ジェミニの身長はメートル近い。ほとんどの者は彼と長話をする  
と首を痛める始末だ。

なるべく優しい声になるように気をつけながら、語りかける。

「おじょうちゃん、何かこいつに用事でもあるのかい？」

「いいえ」

相棒を指さして示すと、腕組みをして横を向いていた相棒の視線が  
ちらりとこちらを射る。

対して、ジェミニの指先を追って視線を這わせた少女は、ひとしきりじつと相棒を見据えると、次の瞬間、勢いよく首を振った。

ジェミニと相棒の目が丸く開かれる。つまりそれは、否定という意味なのだろうか？

「この人じゃない」

少女は尚もハッキリと否定の意を顕にする。

振っていた頭をピタリと止めると、格納庫の方へと視線を向ける。

「あそここの、あれは？」

少女の細い指が指し示す先を見る。

そこには先ほど相棒が乗って帰って来た愛機が鎮座していた。

その赤いボディを一瞥すると、ジェミニは笑いかけながら少女の問いに答えた。

「あれはこいつの相棒さ。ロータスってオレ達は呼んでる」

少女はジェミニの言葉に頷きかけると、動きを止めた。ジェミニは訝しげに少女を眺めていると、唐突に目の前の軽そうな身体が走り出した。

止めるには一秒という時間は遅く、少女の背中は今もうすでに遠くまで行き、小さな影となって消えた。

7

「……なんだつたんだ？」

「さあな。俺は寝る」

「おい、雪也」

さっさと消えた相棒の背中を見送り、やれやれと息を吐き出す。

視線を前へ戻し、ぼりぼりと頭を掻くと、少女の消えた闇へ所在無く目をやった。

今日の夜は、雲で覆われていた。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6469d/>

---

Water Lily

2010年10月11日01時51分発行